

アレクス カーの “Lost Japan” の第一章について

宮原ソニア

アレクスカーの子供の時の夢はお城に住むことでした。父はアメリカ海軍に勤めていて転勤でカーは子供のころから伝統的な文化に影響を受けていました。九歳の時に初めて中国語を勉強し、そのころから漢字に興味をもつようになったのです。中国の山とかお寺にあこがれを持つようになっていたのですが、父が日本に転勤した後は、日本に魅力を持つようになりました。

カーは日本の伝統的な家が一番好きだったのです。一九六〇年ごろの伝統的な家の中には過去のすばらしさがまだ残っていて、遠い昔にもどったような感じがしたのです。家のすばらしさが一目で全部見えるのではなく、何かまだ発見するために残っている神秘的な感じが好きだったカーは日本の屋敷、庭、門、またそれにつづく別の門とかに心をうばわれてしまいました。カーは昔の日本は手でさわれないような美しさ、時には隠れている美しさを描写しています。カーの心は

何となく日本的だと私は思います。例えば徳島県と高知県の境にある祖谷峡のことを書いている時、カーは俳人松御芭蕉が自然の微妙な美しさを俳句に描写したような、または ゆうあん時代 (Yuan era)の中国の画家が描いた絵を述べているような感じがします。

カーは自分が本当に日本に住みたいかどうかを決めるために一九七一年の夏に日本全国の旅に出かけました。この旅では日本人の優しさとかいろいろなことを学び、そしてたくさんの有名な所をたずねたのです。でもこの旅で一番決定的だったことは祖谷に着いた後、カーが絶対そこに住むことに決めたことです。祖谷はその頃までも伝統的な暮らし方が残っていて、不思議な雰囲気があったのです。

一九七一年でも祖谷は宝石のようで山とか森も自然が作ったままで、神様がまだ住んでいるような感じがしたのです。カーは祖谷の家の中は暗くて洞穴のようで、外には霧が山にわき上がり、雲の上の世界だったと書いています。カーは子供の時から夢に見ていたお城がある所のように感じました。

けれども心から感じられる古代からの日本の風景と現代の日本の風景のつながりはもうほとんど無くなってしまったのです。昔の豊かな自然はもう過去のものに

なってしまったのです。一九七〇年頃には都市だけでなく、村もコンクリートとかプラスチックの影響から逃げられませんでした。この破壊の一つの原因は日本が急速に外国の文化の影響を受けたことです。外国に負けないように日本は近代化の道を走ったのです。次から次ぎにいろいろな産業をおこしたり、外国と貿易を拡大したりしました。一九六〇年ごろから三十年の間に日本は経済大国になってしまったのです。

現代は 日本人は昔の暮らし方とはずいぶん違う生き方をしています。カーは昔の日本の本当の美しさがだんだんと無くなっていることを大変悲しんでいます。カーが若い時に見た日本は幻想にだけ残り、外国人だけではなく、日本人さえこの喪失をはっきり理解していないとカーは思っています。カーによると日本人は昔の伝統を新しい伝統ですっかり取り換えるのではなく、伝統的な方法を新しいやり方でおおったと言っています。日本人は昔のことをまだ忘れてはいないけれど今昔と同じことをしているわけでもありません。カーは奈良や京都のお寺などは今でも残っているが日本の本当の本質はそんな所にはないと思っています。日本全体的に広がっている美しさはもうよほど少ないと書いています。

この本を読んで私はカーに同意することもあります。カーとは意見が違う所もあります。カーが書いたように日本の自然のすばらしさは間違いなく少なくなっています。外国が発展している時に、日本だけが伝統のままではいきませんが、外国が発展している時に、日本だけが伝統のままではいきません。二十世紀の終わり頃の数十年間には 国際関係などが最も大切になって来ているのです。近代化している時に 伝統的なものが無くなることはどの国でも起こったことです。

またカーはヨーロッパと日本の変化を比較していますがそういう比べ方はあまり繋がりが無いと思います。その理由はヨーロッパの変化は何百年もの間に起こったのでそのころは外国から経済的、または政治的なプレッシャーや競争があまり無かったので、ヨーロッパではもっとゆっくりした変化が現われました。でも日本の場合は戦争に負けたはずかしさ、それに第二次世界大戦の後、アメリカの占領軍が国を回復させていることに打ち勝って、元のような日本の経済力を世界に早く示したかったんだと思います。何かを得るためには何かを犠牲しなければならなかったことでした。もう破壊された場所はもとに戻らないですけど残っている自然を大事にしていかなければならないと思います。

